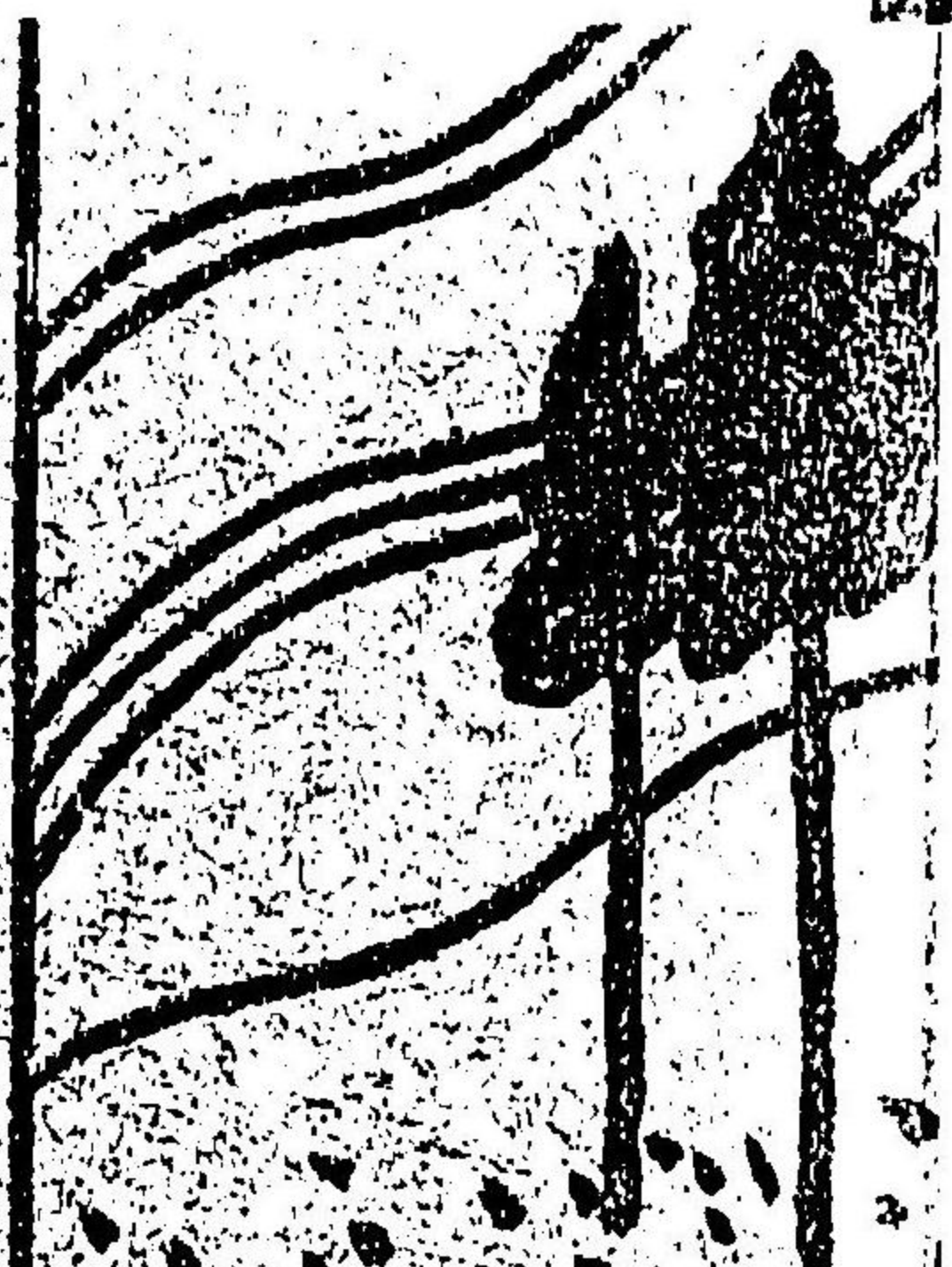


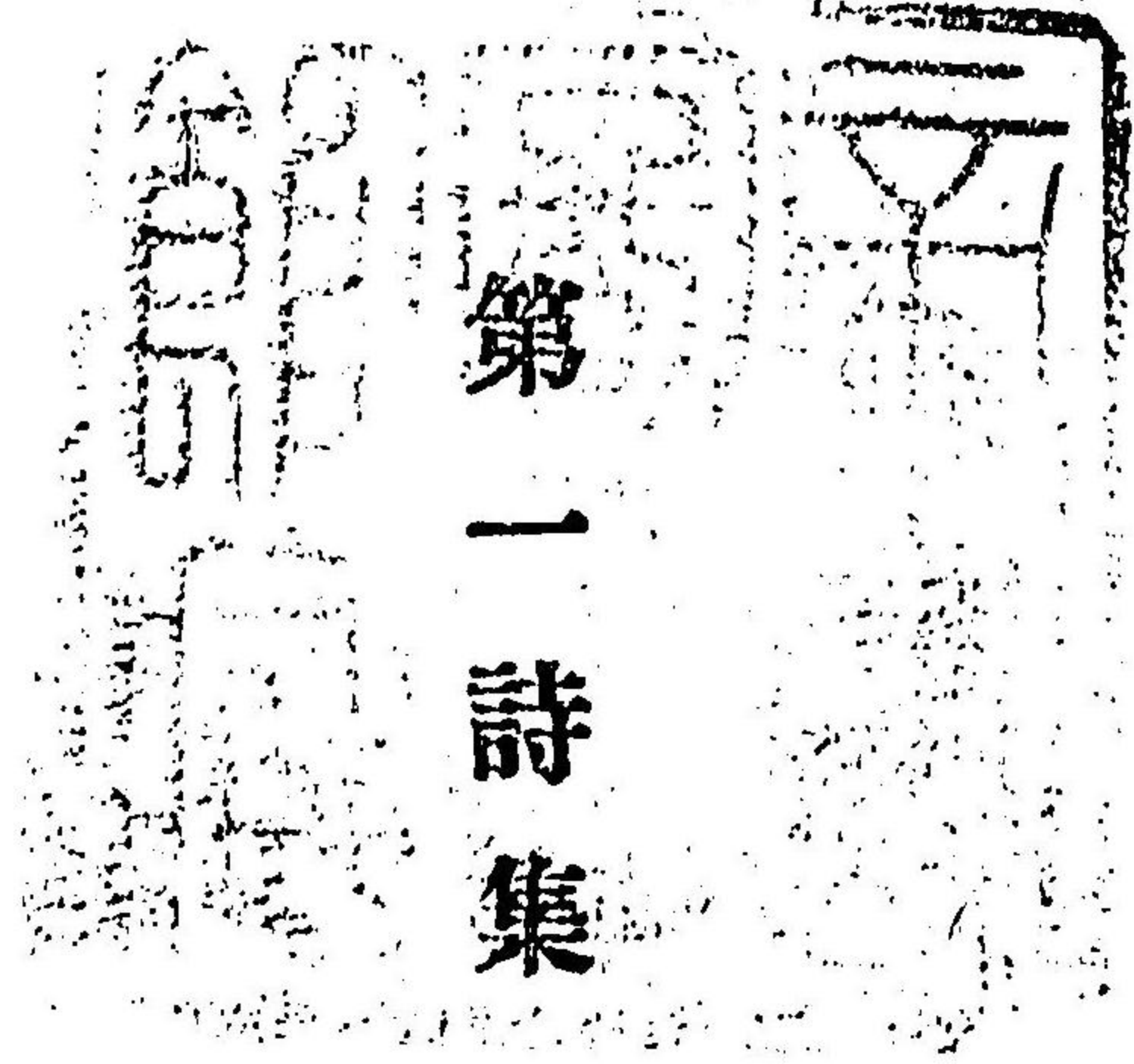
第一詩集

戀水著



特53

109



戀水著



初	○	百	○	松	あ	夕	あ	○	見	流	夢	ア	哀	旅	山
		舌		け		ぶ		舞		イ		し		の	
霜		鳥		虫	び	暮	ら	状	汁		ス	み	情	中	目
.....	次
三〇	二八	二七	二六	二四	二三	二二	一九	一八	一六	一五	一二	一一	八	一	

山の中

爺さんは黙つて木を挽いてゐる。

私の居るのを忘れたやうに

何時までも黙つてゐる。

もう歌も唄はない。

鋸が溜息をついて動いてゐる。

私は退屈してしまつた

「爺さん！」

私は其處らで遊んで来るよ」

「もう直き歸へるんだ、

風も出て来たやうだ、

あんめえ遠くんでねえぞ！」

谷へ下りた。

爺さんの身が見えなくなる。

鋸の音が幽かに響いて来る。

あ！澤の音！

木の葉の間から顔を出してゐる。

私は駆け出した、

落葉の上を。ブワ／＼する、

氣味が悪い。

キーツと厭な泣聲がした、

私はぎよツとした、

またした、

澤の側の鉾ん中だ、

蛇だ！蛙だ！

澤の水――

飲むのも厭んなつた。

蟹を取るのも厭んなつた、

私は急いで谷を渡つた。

鋸の音はもう聞えない。

木の間から麓の村がチラ／＼する。

大きな岩が眼の前に臥つてゐる。

私は飛んで行つて岩へ手をかけた。

意地悪る！

今まで照つて居た日影が

すつと消えツちまつた。

ヒヤツ！足へ！

蝦蟇！蝦蟇！

畜生！思きツて踏んづけた、

胸を食出した、

足の端をブル／＼慄はせてる、

また踏んづけた、

石塊を取つて叩きつけた。

山蛭がぼたツと足下へ落ツこちた、

何をするんだ、

この意地悪る！

風がゴ／＼と木の枝を動揺つて行く。

雲の塊が木へぶつかつて散れる。

頭の上から眞黒な鳥が飛出した。

駄目だ、今日は
私を馬鹿にするんだ。

後ろを振向くと

大きな木が倒れたまんま朽つてる。

日影がすつとさした、

木の葉がざわつく、

また直きにすつと消えツちもう、

吸込まれるほど寂とする。

あ！木が反りかへる、呻る！

私は爺さんの所へ走つて行つた。

爺さんは鼻唄で木を挽いてゐる。

『ヨ、爺さん！』

もう歸らう！』

『今歸へる！』

已れや何處へ行つて来た、

また蟹奴でも掴めえて来たのか』

あ！木が反りかへる、呻る！

爺さんを急がして山を出た。

ドン／＼下りて行つた。

村！村！

ドン／＼下りて行つた。
やツと麓へ来た。
ぱツと夕日がさした、
山！あゝ綺麗だ！

旅 情

日が暮れた。
寒い、寒い。

吹きツばらしの野邊だ。
やツと村へ這入つた、
ほやツと言ふ、
人間の息だ！
ス●ク●ポ●を焚いてゐる、
暖い煙けむりが白く家の周圍まわりに淀よどんでる。
馬が身ふるひした、
馬屋の中でガサ／＼やつてゐる。
ゴタ／＼話聲が！
地爐かまどの火に酔よツばらつた聲だ、
笑つた！嘶なした！

若い男と通りすがつた、
プンと土臭い、
振返つたが眞暗だ。
流溜が臭い！
のど聲で唄ひながら
茶碗をカチャ／＼洗つてる。
娘ツ子が湯殿で話してゐる。
火がパチ／＼燃えてゐる。
今の男だ！
尺八を吹いてゐる。
あの音——あゝ。

村から出た、
また吹きッばらしの野邊だ！

哀しみ

物哀しい冬の野邊をぶら／＼歩いてゐると
何時の間にか
短かい日脚が西へ傾いて、
私は細い長い影を

自分の前に見ることがある。

私は病んでゐる心に氣の毒になつて
聲を出して歌ふことがある、
が、其の哀れな聲は
病んでゐる心を慰めない。

子供の時分に
楽しく遊んだ丘の邊へ行つて見ると
近づくことも出来ないほど
寂しく立つてゐる。

隔がましい木立！冷い土の色！
今日も斯うやつて日が暮れる、
無言の上空がまた私の上に！
小兒！小兒！
あゝ私には呼ぶものがないのだ！

ア
イ
ヌ

北海道の山奥に

熊狩の芝居をやつてゐるやうな
ごす黒い平和が巢を食つて居る。
謀反もない、疑もない、
正直な生活を送つてゐる。
あゝアイヌ！
内地人の斧！がこの間に
お前の森を倒してゐるのに、
あゝお前の身は
深い森の蔭に寝ころんで
歌を唄つてゐる！

夢

お母さん、
昨夜、私しは
——お母さんど——
あゝ怖い夢を見た。

流 汁

眞暗。

濕つた風がチク／＼痛い
石垣の蔭へ隠れた、
齒がガタ／＼慄へる、
びったり、ひ／＼ついた、
外套の袖がヌル／＼と觸つた、

流汁！

石垣の横ツ腹、
土管からビチ／＼落ちる、
温もつた、臭い！

『何してるんだ、早く、早く！』
ビチャツ！

土管から何か落ちた、
酢ッぱい、むせるやうな。

『早く！早く！』

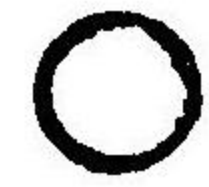
女の聲！

戸が開いた、

「オー寒い！」

見舞状

A君が肺病になつた。
私は今見舞状を書いてゐる、
驚くほど筆に力がはいつて来る。



寝返りばかり打つ。
もう二時だ。
明日は會がある——女も来る！
軒下の猫がなく。
何時まで、畜生！
あゝ——厭ナ！

行け！此屋には居ない！

雨がヂタ／＼降る、

風が吹く。

畜生、また！

行け！行け！此屋には居ない！

あゝ——厭ナ！

隣の室、メザマシが鳴出した、

入學試験だ、もツくら起きた。

あゝ、また！

あぶら

夜が明けた。

女は歸つて行つた。

私は井戸端へ行つて顔を洗つた。

其から身を拭いた、

盥の水にあぶらが浮いた。

朝風が身へしみる、

バラくと木の葉が落ちた。

夕 暮

パケツへ水が落ちる、
米をどぐ音がする、
雀がなき出した、
裏の鳥小屋で鶏が騒いでゐる、
あ——もう日が暮れる。

あ け び

あつた！あつた！
口の開いたあけび！
私は鍬の中へ飛びこんだ、
ア！痛ッ！
荆棘で足をひッ搔いた。
頭の上で、百舌鳥が囀る、

畜生！ シッ！

二三間飛んで行つた。

フラ／＼する木の末へ止つた、

また嘲る。

畜生！ シッ！

足から血がボタ／＼たれる。

松 虫

眼がさめた。

枕時計がチン／＼とニツなつた。

静かだ、

たまらないほど寂しい。

松虫がなき出した、

かすれた聲だ、

籠の中にたんだ一ツ。

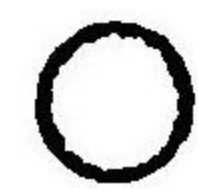
だん／＼弱つて行く、

もう柱や壁に泌み入る力がない、

齒の浮いたやうな聲だ。

あー身が浮いて来た、

暗い海の上だ、
あ！身が浮いてゐる、
蒲團！蒲團！
暗い海の上だ、
あ！松虫がないてゐる。



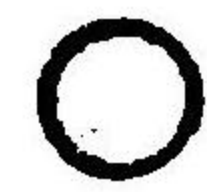
泥道に車が惱んでゐる、

荷車が坂に苦しんでゐる、
私は其を見ると
壁をかけて後から押してやる。
私は感謝の聲が聞きたい！

百舌鳥

透明つたコバルト色の空。
白い雲が一ツ

フワリ、森の上を流れた。
高い木の末うしろに
百舌鳥が鳴いてゐる。



小暗い。
まだ降つてゐる。
雀が騒いでゐる、

可愛さうに、
寢床がぬれてゐるんだ。
身を脹らして、
濡れた枝から
私を見た、
あら、また！
あゝ。さう思ふた、
私だつて同様だ！

初霜

昨夜小さい西風が吹いて
今朝初めて霜が降りた。
道の上も
畑の上も
木の葉も
薄く化粧をしてゐる。
初霜！

にこッと笑つてゐる。
秋と冬のキッス！
にこッと笑つてゐる。

第一詩集終

明治四十二年七月廿一日印刷
明治四十二年七月廿七日發行

奧附
金十錢

編輯兼
發行者

西本波太

東京市麴町區飯田町六丁目二十四番地

印刷者

萩原勝次郎

東京市神田區三河町二丁目十四番地

印刷所

丸利印刷合資會社

東京市神田區三河町二丁目十四番地

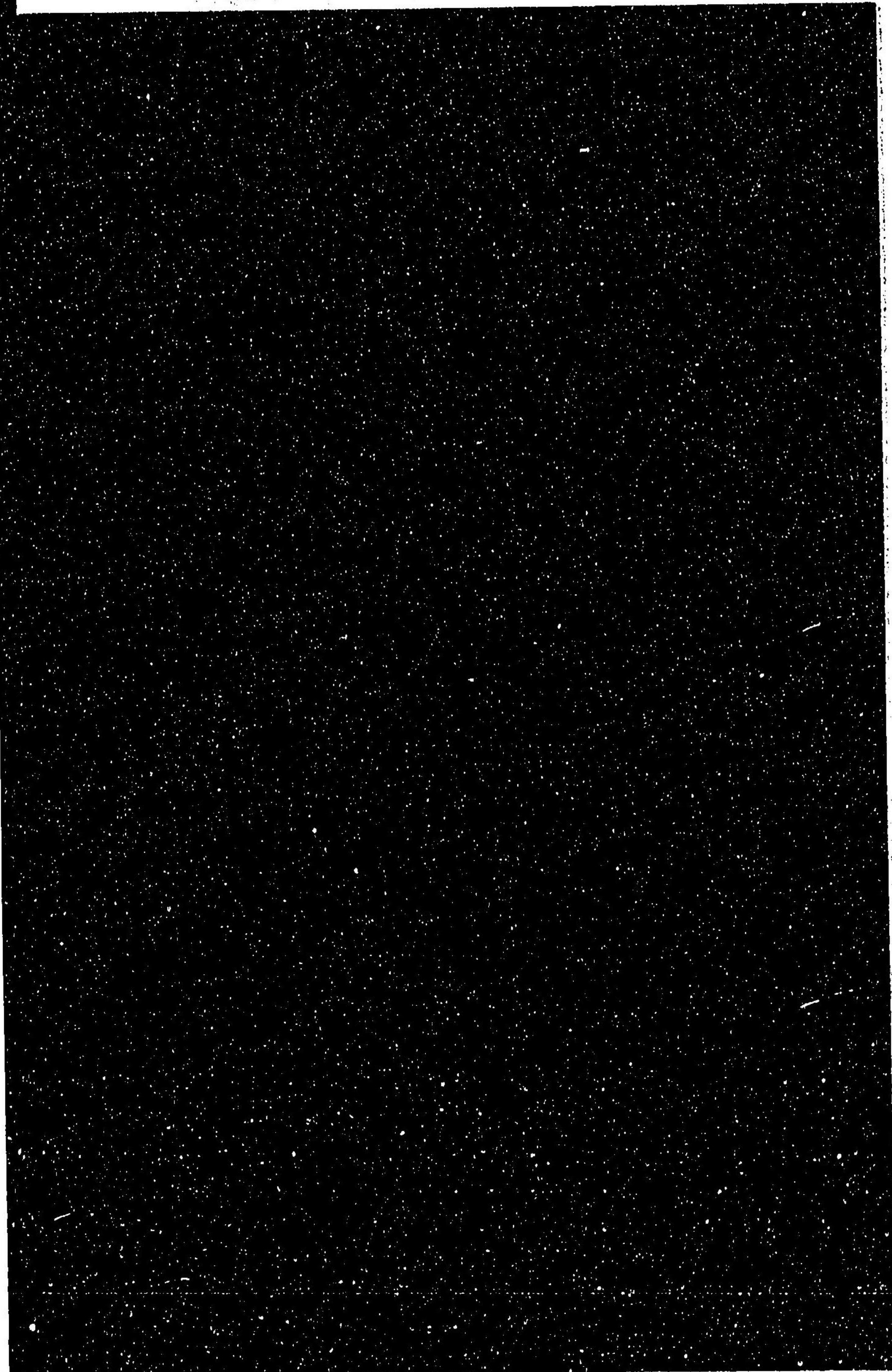
電話本局二四三七

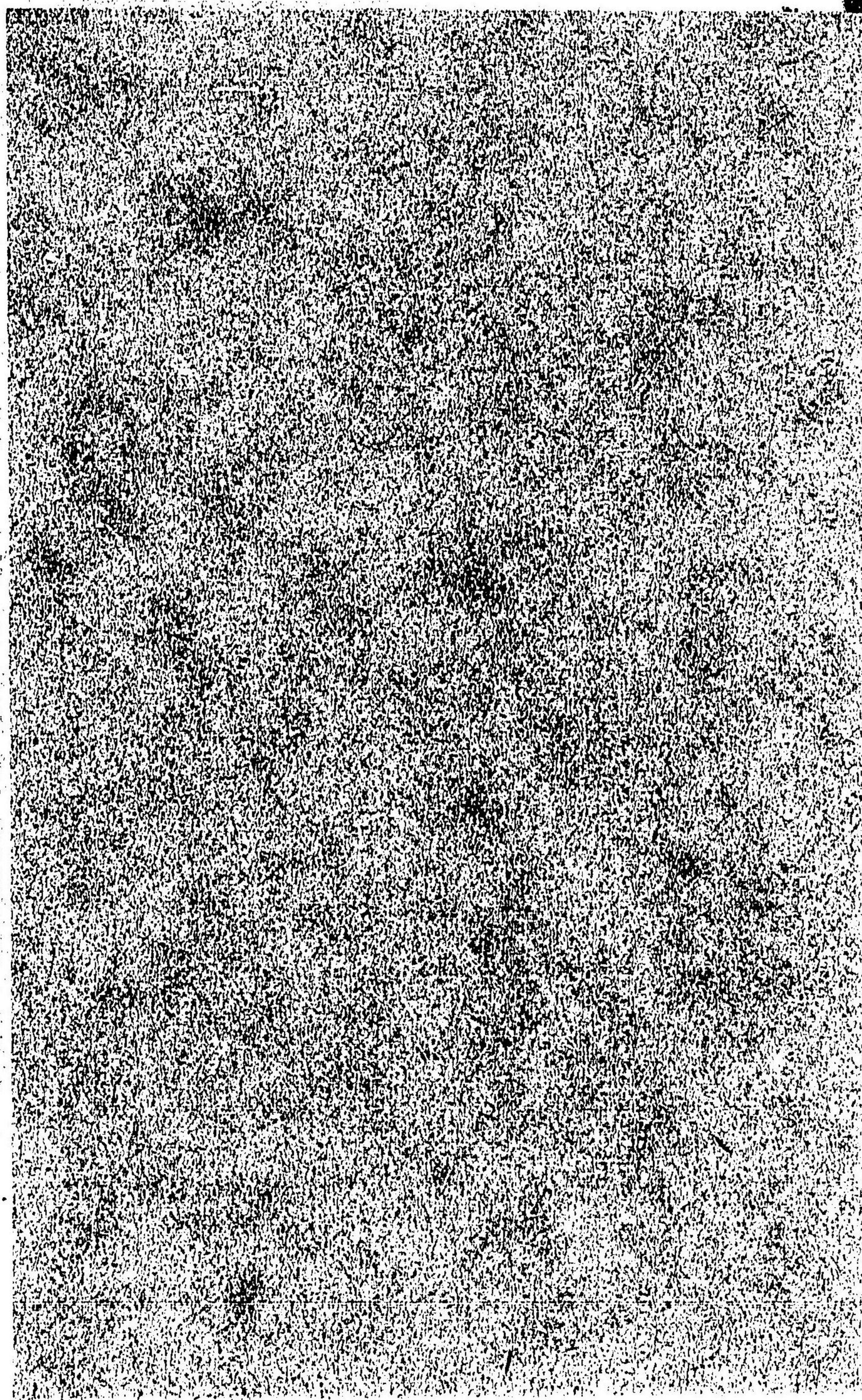


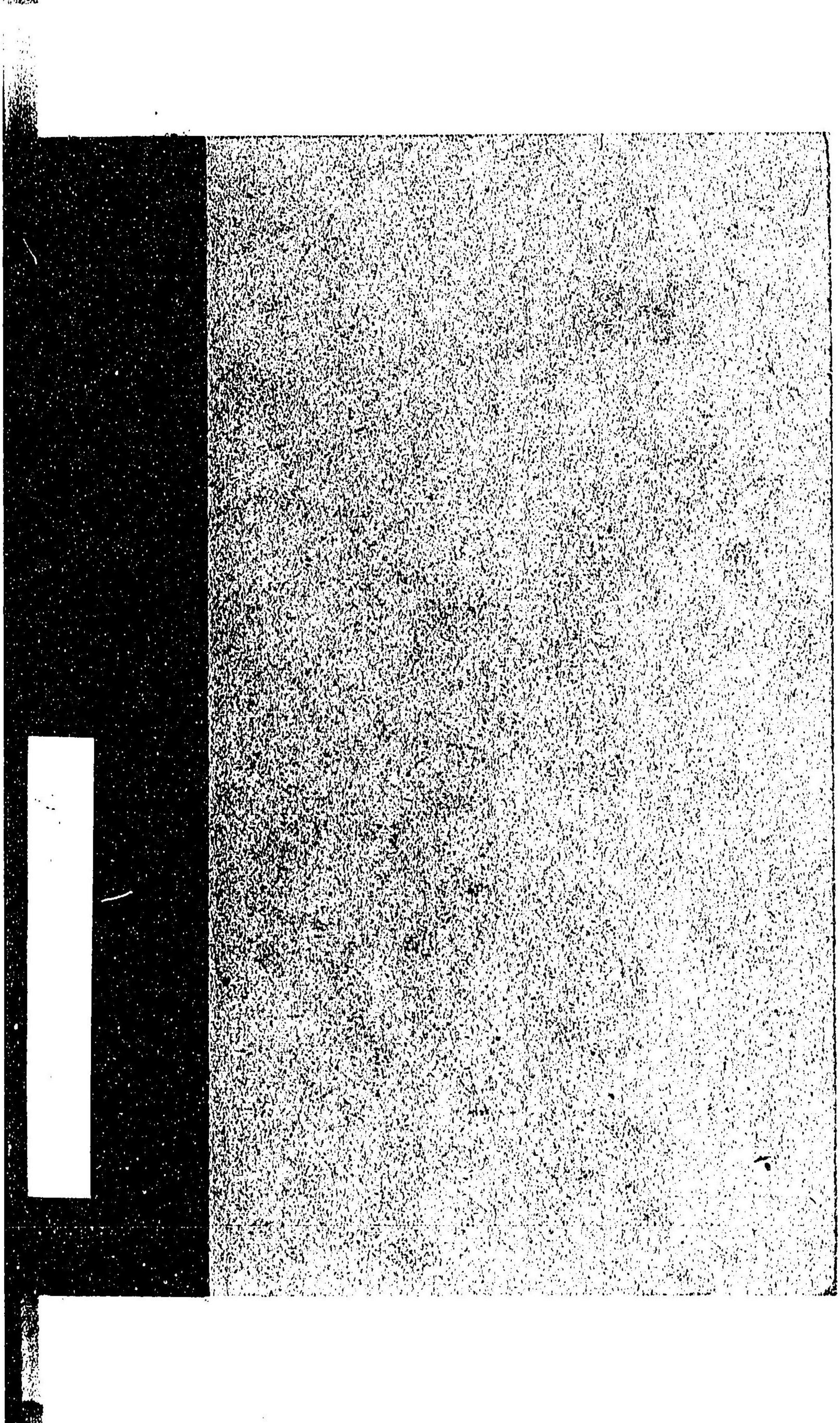
發行所

東京市麴町區飯田町六丁目
口語詩社

216
779







特53

109

第一詩集

恋水

国立国会図書館

088039-000-0

特53-109

第一詩集

恋水/著

M42

DBG-0136



